フッサールの『純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想』第二巻における存在の階層構成について

赤　松　常　弘

(一)

フッサールは諸科学と哲学とを究極的に基礎づけるという学問論的課題を自己の現象学の根本課題と考え，その課題の解決のために，現象学的還元などの様々な方法を考案，彫琢し，また多様な主題について現象学的分析をおこなった。その方法的試みはたえず変化し，分析の主題も広がっていったが，かれの強靱な思索を根底において支えていたのは，したがって最初期から晩年に至るまで一貫して保持されていたのは，この学問論的課題であった。『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下『危機』と略記）は，この課題に対するひとつの回答であり，晩年においてフッサールが到達した境地を示すものであったが，完結したものではない。フッサールはこの課題に十分に答えることなく，この世を去ったというべきであろう。

今日われわれは，フッサールが思索を開始した前世紀末と同様，科学技術文明がかかえる様々な問題を解明するなかで，科学と哲学のあり方を新たに根本的に問いなおさざるをえないという学問論的状況におかれている。われわれはフッサールが提起した学問論的課題をひきつぎ，かれの現象学思想を批判的に継承しながら，この課題に十全に答えるべく前進しなければならないが，そのためには，次々と整理され公刊されるフッサールのぼう大な遺稿のなかから，その精髄をひき出し，利用できるようにすることも，ひとつの必要な作業であろう。この小論では，いわゆる『イデーンⅡ』（純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想（イデーン）第二巻）をとりあげて，若干の考察をおこなうことにする。

『イデーンⅡ』は「構成についての現象学的考察』と題され，「物質的自然の構成」，「生命的自然の構成」，「精神的世界の構成」の三つの部分からなり，自然，身体，心（ゼーレ），精神（ガイスト）の構成が論じられている。したがって通常この書は存在の階層構成論として読まれ，個別的には，フッサールの身体論，精神論，人格論，自我論などとして読まれることが多い。それはそれで必要なことであり，われわれもそのようなものとして読むつもりであるが，それにとどまらない読み方をしたい。

『イデーンⅡ』を『イデーンⅠ』，『イデーンⅢ』との連関のなかにおいてみるならば，『イデーンⅠ』における現象学的還元と純粋意識の構造の解明につづいて，『イデーンⅡ』で上述のような主題を「体系的に定式化し，その問題群を典型的な形で解決」[1] しようとしたのは，「その結果，現象学が，物理的自然科学や心理学や精神科学などに対して持つところの，しかしまた他方では，アプリオリな諸学全体に対して持つところの，むずかしい関係が，本当に明瞭にされてゆくこと」[2] を目指してであったのである。この「むずかしい関係」を明瞭にしようとする試みは『イデーンⅢ』でなされているが，これは初期草稿（1912年）

のままで十分に展開されていない。それに対して『イデーンII』は，1912年の最初の草稿に様々な修正補足を加え，改作を重ねたうえ，弟子たちによって編集されてなったものである[3]。そのためこの巻は最初の意図からはずれていった面と，最初の意図を保持しながら，上述の「むずかしい関係」を明瞭にする学問論的考察を深める基礎をなすものとして，より内容豊富で広がりのあるものとなった面とがあると思われる。われわれは上述の問題群をとりあげながらも，それをフッサールの「学の基礎づけ」という学問論的課題と関連づけながら考察することにする。

上述のように『イデーンII』は，第一編「物質的自然の構成」，第二編「生命的自然の構成」，第三編「精神的世界の構成」の三編から成っているが，学問論的視角からみるならば，それぞれの編には，物質的自然を対象とする物理的自然科学，生命的自然を対象とする生命的自然科学（動物学，自然科学的人類学，科学的心理学など），人格と人格共同体，すなわち精神的世界を対象とする精神科学（人格論，自我論，社会論，共同体論など）が対応しており，それぞれの科学がその対象をいかにして構成するかが明らかにされている。

ここで注目すべきは，第二編で心（Seele）を対象とする科学が広義の自然科学に属するものとされていることである。フッサールが用いる Seele という言葉ないしは概念は，主として人間の心をさすが，動物も Seele をもったものと考えられ，動物を動物として生かしているのはその Seele であると考えられている。これは古代ギリシャ以来の伝統的な考え方であろう。心（Seele）はつねに身体（Leib）と対になって用いられる。動物の身体であれ，人間の身体であれ，身体は心とひとつであることによって生きた身体であり，逆に，心は身体とひとつでなければ実在性をもたない。しかし人間においては身体を越えた心のあり方があり，それは精神（Geist）と呼ばれる。

身体も心から切り離されて，物質的自然の一部と考えられることもできる。そのような物質的身体を前提にして，それに心が結びついたものとして動物や人間を考えるとき，動物や人間は広義の自然として，つまり生命的自然としてとらえられている。[4] したがって身・心の一体となった存在としての動物や人間を対象とする科学は，そのかぎりでは，広義の自然科学なのである。また心理学も，それが人間の心を身体に結びついたものとして，すなわち，心的なものを人間における単なる一つの存在層としてとらえ，究明するかぎり，物理的自然に基づけられた身・心的自然を対象とする自然科学のうちに組みこまれる。[5] こうして，第一編と第二編では広義の自然科学が対象とされており，第三編では精神科学が対象とされていることになる。

ところで，それぞれの編では，以上のような諸科学がそれぞれの対象領域においてどのような認識を獲得したかが述べられているのではなく，それぞれの対象がどのように構成されたかが分析され，記述されている。科学はその対象を自らが構成したものとは考えず，対象は与えられたもの，それ自体存在するものと考えるが，これは自らの対象構成作用を忘却することから生ずる虚偽意識である。この自己忘却を覚醒させ，諸科学がその対象を何に基いて，いかに構成しているかを明らかにする現象学的分析をおこなっているのが，『イデーンII』だと言えるだろう。それは同時に，諸科学を相互に関連づけ，諸科学の成り立つ基盤を解明することでもある。この点で『イデーンII』は，『危機』に先行しながらもそれと同一の主題を扱っているものとして読むことができる。

『危機』は数学的自然科学を典型とする客観的諸科学によって構築された客観的世界を生

活世界へ還元し，生活世界を基盤にして，客観的諸科学が形成される仕方を解明しようとしていた。『イデーンⅡ』ではまだ生活世界の概念は明瞭にはあらわれていないが，それに対応するものとして人格的共同世界の概念があり，諸科学は共通の基盤としてのこの世界からその一局面を抽象し，対象領域として区劃することによって成り立っているとする見解が，まだ十分明確にではないが，述べられているように思われる。この点で『イデーンⅡ』は『危機』に先行しながらそれと同一の主題を扱っており，しかも『危機』とちがって，生命的自然の科学や精神科学も分析の主要な対象にしているので，『危機』の内容を補足するものとして読むことができる。そこでこの小論では，『危機』との対比も考慮しながら，『イデーンⅡ』における存在の階層構成の現象学的分析について，学問論的視角から考察してみよう。

(二)

第一編においては，感覚的事物の構成，実在的・因果的事物の構成，物理学的事物の構成という三段階を経ながら，物質的自然が構成されることが述べられているが，この最後の段階において構成される物理学的事物が物理的自然科学の対象である。それは感覚的性質を越えて単に量的な区別をもち，幾何学的に規定されるものである。[6] こうした物理学的自然は，自然主義的で理論的な態度をとる理論的主観が，感覚所与に基いて構成したものである。感覚所与から感覚的事物が構成され，感覚的事物とその環境との因果的関係の認識に基いて，実在的・因果的事物が構成される。実在的・因果的事物は，環境の変化を通じて同一のもの，「それに属する環境との関係において持続的な諸性質の統一体」[7] である。例えば事物の色は環境の変化，明るさの変化に依存して変化するが，その場合，「同じ環境においては同じ結果が生じる」という規則的な因果的依存関係を通じて，その事物の客観的実在的な色が確定される。[8] 鋼鉄ばねの弾力性も，環境との因果的依存関係のなかで確定される。[9] 感覚的事物は，それを構成する個別的主観と相関し，それに相対的であるが，実在的・因果的事物は個別主観を越えた客観的実在性をもっている。しかしまだ感覚的性質を越えていない。物理学的事物が構成されるためには，この感覚的性質が捨象されなければならない。フッサールはここでは，知覚器官としての身体の異常（例えば指のやけど，サントニンの服用）を通じて，事物がそれを知覚する身体的主観と相関的に構成されていることが知られ，その相関性，相対性を克服することによって物理学的事物が構成されるとしている。[10] 『危機』と比較してみるならば，本書ではまだ，「理念化」について述べられておらず，物理学的事物が数学的幾何学的に規定された理念的構成体であることが十分には明らかにされていない。

第二編においては，動物学，自然科学的人類学，心理学など，いわゆる生命的（アニマーリタシス）（有心的）自然の科学の対象である心的実在がどのように構成されるかについて，現象学的分析がなされている。さしあたっては人間について論じられているが，人類学，心理学の対象である人間は，自然的実在としての人間である。[11] われわれは内観によって自己の心的状態や作用について知ることができるが，そうした心的なものは，物質的なもの，物質的身体と結びついたものとしてとらえられる。物質的自然を前提にして，そのうえに新しい心的な存在層を積み上げるこのようなとらえ方は，自然主義的態度といわれているが，生命的（有心的）自然の科学は自然主義的態度によって人間を，人間の心をとらえており，心は純粋意識としてで

はなく，自然対象として，実在性をもったものとしてとらえられている。しかしフッサールからみれば，これは本来，身心一体である人間を二つの存在層にわけて，外的に結合したものにすぎない。心が実在性をもつのは身体とひとつになっているからであるが，この身体は物質的身体ではなく，生きた身体である。この身心統一体こそが科学の対象である。[12] 第二編の第三章と第四章でこの具体的な統一体がいかにして構成されるかかが述べられている。身心統一体はまず人間的主体（心理物理的主体）として構成され，ついで自然対象として客体的に構成される。身心統一体とは死んだ物体ではなく，生きて働いている身体のことに他ならない。このような身体の自己構成は，いわゆる二重感覚，触覚の二重性を介してなされる。左手で右手に触れた場合，左手に生じる感触は右手の表面の状態をあらわすものとしての感覚（Empfindung）であると同時に，左手において感じられている左手自身の状態としての感覚（Empfindnisse）でもある。しかも触れる手と触れられる手は相互に転換する。こうした触覚の二重性において，主体としての身体と客体としての身体とが統一される。ここでの客体としての身体は物質としての身体ではなく，対象身体であり，これをたんに身体といえば，主体としての身体は心ということになる。身心統一体とは主体即客体的身体である。視覚には触覚のもっている二重性はないが，触覚と共同しながら，身体の自己構成のために働いている。[13] フッサールは素描しているだけだが，それをより詳細に展開することはひとつの課題である。

主体としての身心統一体は，対象性の側面をももっているが，しかしそれはまだ主観身体と相即していて，自然対象としての実在的人間としてはとらえられていない。自然対象としての人間の把握は自己投入（Einfühlung）によってなされる。[14] 自己の身体ではなく，他者の身体が，単なる物体ではなく，自己の身体と同様生きて働く主観身体として，したがって心を一体となったものとしてとらえられる過程を，フッサールは，自己投入，根源的現前，（Urpräseng），間接的現前（Appräseng）といった概念を用いて説明するが，これは『デカルト的省察』でも詳しく述べられているところでもあり，省略する。要は他者の身体の認識を媒介にして自己の身体が客体的にとらえられるということである。[15] 私の身体は，私が「ここ」から他者の身体を見るのと同様に，他者の「ここ」から見られていることを知ることによって，自然対象となる。[16] つまり相互主観的関係のなかで，主体としての身心統一体は，客体的実在となる。しかしこれはまだ必ずしも物理学的物体ではないだろう。

生命的（有心的）自然の科学の対象としての心的実在は，以上のように，相互主観的に構成されたものである。しかし科学それ自身はこのことを知らず，物質的（物理学的）自然を前提して，そのうえに心的なものを新しい存在層として積みあげる。

第三編では，精神科学の対象である人格と，人格的共同世界，精神的世界の構成が論じられる。人格と身心統一体としての心理物理的主体との相違は，人格が環境世界の主体であるところにある。[17] 人格の環境世界はアン・ジッヒな世界ではない。[18] 物理学的現実ではない。[19] 人格は様々な様態をもって環境世界を意識しながら，様々な形でそれに関係する。その意識様態はたんに理論的であるだけでなく，実践的で，感情的，評価的などの様態もあり，関係は行為的でもある。[20] 人格と環境世界との関係は因果的関係ではなく，動機づけの関係であり，対象の意味を志向して関わる主・客の志向的関係である。[21]

人格は他の人格と関わるが，その場合，ある人格は他の人格を人格的主体であると端的に理解し，その存在を了解する。[22] そして相互理解と交通（コムニカチオン）によって，共同の世界をつくりあげ

る。[24] 共通の環境世界をもった人格的共同体，社会的世界をつくりあげる。精神的世界とは潜在的，顕在的に相互に交通する社会的主体と社会的客体の総体的世界のことである。[24]

この世界はわれわれの日常的な世界であり，かくべつ，事新たに構成された世界ではなく，むしろ，生命的自然，物理学的自然がこの世界から抽出，構成されるような基盤としての世界である。精神科学はこの世界の本質的類型を定式化することによって成り立つ。この精神的世界あるいは人格的共同世界は『危機』における生活世界と通じるところをもっている。『危機』では人格的共同体の分析は背景にしりぞいているが，科学が成り立つ基盤である生活世界が，われわれが日常的に生きる人格的共同世界であることは間違いないであろう。

『イデ！ンⅡ』は諸科学の基盤である生活世界を強調し，この世界から諸科学がいかにして形成されるかという視角を明確にもって論述されたものではないが，『危機』と対比しながら本書も同様の視角から読むことができる。

(三)

精神科学は精神的世界，すなわち共通の環境世界をもちながら相互に交通しあう諸人格の共同世界を直接の基盤とし，この世界の本質的構造を究明するものであり，一方で人格論，他方で社会論，共同体論などとして展開されるが，[25] 物理的自然科学と生命的自然科学は，この共同世界の具体的現実から何かを捨象することによって，その対象を抽出し，それを考究することで成り立っている。

狭義の自然科学の対象である物理学的事物は，上述のように，感覚的事物が実在的因果的事物として客観化されたものから，さらに感覚的質が捨象されて，数学的幾何学的規定が適用される「空虚で同一の何かあるもの」[26] という抽象体となったものである。この物理学的事物は人格的共同世界を基盤にしてどのように形成されるのか。

相互に交通する諸人格は共通の環境世界をもっているが，この環境世界には人間にとって有用な事物や道具などが含まれている。[27] あるいは絵画などの芸術作品でも，見方をかえれば物質的な事物である。しかしこれらはまだ直接に物質的事物，物理学的事物ではなく，人格との関係で意味をもつ価値的なもの，美的なもの等々である。人格の環境世界は実践的世界であり，この世界を構成するすべての事物は，人格との関係で実践的意味をもっている。第一編における物質的自然の構成の第一段階をなす感覚的事物は，人格的共同世界の事物から実践的価値的美的等々の意味をはくだつすることによって構成される。つまり実践的態度から理論的態度への転換がまず必要なのである。[28] 理論的態度に転換したとき，他の態度がなくなってしまうわけではない。価値的美的等々の実践的態度はいわば背後へおしやられ，潜勢化するにすぎない。青空を物理学者として観察する人も，青空を美しいと感じることができるが，ただ物理学者として活動しているときは，その美的感情的態度を顕在的には生きていないだけである。[29]

以上のように，理論的態度に転換することによって，人格的共同世界の諸事物は感覚的諸事物としてあらわれる。理論的態度は保持されながら，感覚的事物から実在的因果的な事物が，さらには物理学的事物が構成される。その過程は先に述べた通りである。

次に動物学，自然科学的人類学，科学的心理学など生命的自然の科学の対象である身心統一体，心理物理的統一体は人格的共同世界を基盤としてどのように抽出されてくるのか。そ

れを明らかにするには，人格とその環境との関係と，身心がひとつになった心理物理的主体とその環境との関係を比較してみればよい。

私の手に棒があたり，その接触感，圧力，痛みを感じるとき，[31] 私の身体と棒との物理的関係と私の触覚，痛覚とは相即している。このように，物理的（自然的）関係と心的過程とが平行，相即するとき，それは心理物理的過程と呼ばれ，この過程において働く根本法則は，物理的自然において働く因果性に対して，条件づけ（Konditionalität）と呼ばれている。触覚以外の諸感覚，視覚，聴覚なども原理的には同じ法則に従うものとされ，感覚，知覚する身体的主体は総体として心理物理的主体である。

これに対して，私が洋服の生地をその美しい色合いややわらかい感触のために選ぶとき，あるいは戸外の騒音にいらだって窓を閉めるとき，さらにまた，他人のとる態度に反応して，私がある行動をするとき，私は心理物理的に条件づけられているとはいえない。[32] ここに例としてあげられているのは，人格とその環境をなす事物との価値的，美的，実践的関係，および人格と人格との関係である。一般に人格的共同世界における関係は，総じて心理物理的関係を越えている。この世界において人格は，有用な物品，道具，芸術作品などに関わり，他の人格と関わる。しかも特定の個別人格に関わるだけでなく，人格共同体の一員として，社会的制度，国家，法，教会などに関わる。[33] あるいはそのような制度を介して他の人格と関わる。このような関係は心理物理的関係ではない。フッサールはそれを心理物理的条件づけと区別して，動機づけ（Motivation）の関係と呼んでいる。[34] 動機づけの関係は志向的関係であり，対象は単に受けとられるのではなく，人格的主体によって意味付与されている。事物がたんなる物理的物体ではなく，使用物，道具，芸術作品であるのは，人格とそれらのものとの関係において，価値的美的等々の「意味」が付与されているからであり，人格はこれらの対象にこの意味的関係を介して関わる。

ある人格が他の人格と関わるときも，他の人格が表出する意味，すなわち身振り，表情，行動，言葉などによって表出する意味に動機づけられて，それに関わる。[35] 他人が表出する意味は，私がそのように受けとったものでもあり，そのかぎりで私が意味付与したものでもある。

志向的関係と区別されるのは実在的関係である。[36] 実在的関係の典型は物理的因果性であるが，心理物理的関係も，それが身体の実在性に基いているかぎり，実在的関係の一形態とされる。志向的関係と実在的関係の区別は，人格の志向する対象が実在的でなくなってもその対象は意味として，意識のノエマ的相関者として残ることによって示される。[37]

以上のように，人格と人格の関係，人格とその環境的事物との関係は意味的志向的関係である。フッサールは意味を表現と表現されるものとの統一として考察する。[38] その場合，ことばとその意味の関係がモデルとなっている。書物を読むということは，物体としての書物の紙片に印刷されている文字をみることではなく，その文字が，文章が，さらにはその書物全体があらわしている意味を読みとることである。芸術作品はすべて精神的意味を表わしている。コップや家などの有用物は，その感覚的存在規定，例えばその形や材質など，その使用価値とのつながりが強いが，やはり意味を表現したものである。[39] 人間も人格的精神的存在としては，意味を表現するものである。[40]

さて，以上のように，人格的共同世界における人格相互の関係，人格と環境的事物との関係が，意味的志向的関係であり，実在的因果性をこえた動機づけの法則によって成り立って

いるとすると，生命的自然の科学の対象である心理物理的統一体，身心統一体は，この人格的世界における意味的志向的関係を捨象することによって構成されるということができよう。

人格は様々な形で精神的意味を表出し，芸術作品や有用物も精神的意味を担った制作物である。人格と人格，人格と環境的事物はこの精神的意味によって直接に関係しているが，しかしこの意味は中空に浮かんでいるわけではない。人格は身体を介しながら精神的意味を表出する（言語表現を含む）。芸術作品もそれがどんな形態のものであれ，なんらかの物体性をもって，そのうえに精神的意味が表現されている。道具，有用物においても同様である。これらの物体性は人間の身体性に対応するものであろう。

人格的共同世界から精神的意味を志向する関係を捨象すれば，人間は身体的存在者としてあらわれ，環境的事物は人間の身体性に対応する事物になる。事実われわれは，相手との精神的つながりを失なったとき，相手をただ身体をもった生き物として見るという経験をする。科学はこれを方法的態度の転換として自覚的におこなう。人格的世界から精神的意味を捨象して身心的実在の世界としてとらえる。これが心理物理的条件づけに規制された生命的自然の領域である。

心理物理的主体，すなわち心をもって生きて働く身体的主体は，上述のように，感覚的事物と相関する主体である。物理学的事物はこの主体と対象の感性的関係を捨象することによって構成されることも上述した。以上のことからわれわれは，諸科学はわれわれが日常生きている人格的共同世界からその本質を様々な次元で抽出しながら成り立っていると結論づけることができるだろう。

（四）

ここで『イデーンⅡ』全体の構成を見直すことにしよう。現象学的分析によって明らかになるのは，第三編の精神的世界が出発点をなしていて，この世界から第二編の生命的自然が抽出され，さらにそれから第一編の物質的自然が抽出されて，自然科学が成立するということであった。フッサールの叙述はこの過程を逆にたどり，まず物質的自然とそれを対象とする物理的自然科学から出発し，この自然が所与の，自体的存在ではなく，構成されたものであることを明らかにし，隠ぺいされている身心的主体を顕わにした。次にこの主体を対象とする生命的自然の科学が，物質的自然を前提にして，そのうえに心的実在を結びつけてとらえようとすることを批判して，この身心的統一体が人格的共同世界のなかから抽出されることを明らかにした。そして諸科学の基盤として人格的共同世界を提示してみせた。

ところが科学自身は，物質的自然を基盤と考え，そのうえに生命的自然，精神的世界が形成されたものと考える。たしかに地球史をさかのぼってみれば，生命のまだ発生していない物質的自然の世界がまず最初にあったであろうし，その物質的自然のなかから生命が発生し，様々な生命体の進化発達のひとつの極において人間が生まれ，自然的本能を越えた高度の文化を形成しながら，精神的世界を構築してきたと，大雑把に言えるだろう。これはいわば存在の順序である。しかし物質的自然からいかにして生命的自然が生じ，生命的自然から人間の文化的精神的世界がいかにして形成されたかはまだ明らかになっていない。三つの段階あるいは階層は連続しているといっても，そこには非連続，飛躍が介在しており，下位の段階を基にしながら上位の段階を説明しつくすことはできない筈で，たしかに上位のものは下位

のものに基づけられているが，下位をものを統合して質的に新しい次元の領域になっている。したがって上位のものをとらえるには，下位のものとは異なる新しい説明原理が必要である。むしろわれわれ人間は，これまで自己の文化的精神的世界の認識から出発して，その基底において潜在的に働いている下層の生命的，物質的自然へと下降しながら認識してきたといえる。人間は自らの精神の認識をモデルにして他の生命体を類比的に認識し，さらに生命性を捨象して物質的自然を認識してきた。フッサールの現象学はこの認識の順序を示していると言えないだろうか。人格的共同世界，あるいは生活世界がわれわれの認識の出発点である。日常的な経験知にとっても，体系だった科学知にとっても，これが基盤であることには変りがない。そこから出発してわれわれの認識は，人格，精神の基底において働いているがそれに統合されて潜勢化している生命，物質の認識へとおりていく。フッサールも精神的なものは身体を媒介にして表出されるし，さらに物質的身体を介することで自然に結びついていると述べている。[41] この場合の自然は外的自然であるが，かれは内的自然をも精神的自我の底層をなすものとして問題にしている。[42] この問題は人間自身における自然（生命性，物質性）の問題として，したがって自覚的な活動の底層にある暗い隠された，習性的，無意識的な働きとして解明されるべきものであるが，[43] ひるがえって人間の外なる生命と物質の解明ともつながってくる。

アニミズムは人間の外なる生命体，物質的事物にも人格的な魂がやどっていると考えた。それは人間の精神の自己認識をモデルにして外的な生命，自然をとらえたものともいえるし，人間の精神が無意識の底層において生命性や物質性に規定されていることの表現でもある。したがって外的世界に投影されていた人格的な魂が消えて，他の生命や物質がそのものとして見えてくるにつれて，人間の自覚的な精神の底層にある生命性と物質性も科学的に解明されるようになった。

アニミズムや呪術が消えて近代的な科学と技術が形成されてくるのは，フッサールの言うように，単なる見方の転換によるのではなく，それなりの歴史的な理由があるだろうが，その分析をすることはこの小論の主題ではない。

われわれが主張したいのは，人格的共同世界あるいは生活世界での人間の自己認識，あるいは世界認識を土台にして生命的自然の科学，物質的自然の科学が成り立ってくるというフッサールの見解は，われわれ人間の認識の順序を指摘したものとしては正当であるということである。しかしそのようにして成立した科学は今や逆に存在の順序に従って地球上のあらゆる存在者をとらえようとしている。物質的自然から生命的自然，精神的世界へと。その試みをわれわれは否定するものではない。ただ精神を生命へ，生命を物質へとより基底的なものへ還元するだけでは，高次のものはとらえきれないことは指摘されねばならない。

すでに特定の存在の仕方をしているわれわれ人間は，その存在の仕方によって制限された認識をもっている。人間はいや応なく人格的共同世界のなかに存在させられており，人格主義的態度をとっている。それはこの世界を生きるかぎりとらざるをえない自明な実践的態度である。広義の自然科学が共有する理論的態度，自然主義的態度は，それに対立してはいるが，やはりこの世界を実践的に生きる人間がいだく態度であることには変りない。自然探究者，自然科学者は人格的共同世界の外にはいない。その世界のなかにあって理論的態度をとって自然を探究している。したがって自然科学的あるいは自然主義的態度は精神的態度の一形態である。[44] それは実践的に生きるなかで生じる態度である。ただし何故そのような態度

が生じるかについてはフッサールは何も述べていない。かれは自然主義的態度は人格主義的態度に従属するものだが，ある抽象によって，あるいはむしろ人格的自我のある種の自己忘却によって，自立性を得てくると述べている。[45]

人格をとりまく事物世界はわれわれの生活の環境的世界であって，物理学的世界ではない。つまり，さしあたってはそれは実践的対象であって理論的対象ではないが，そのうちに理論的対象となる可能性を含んでいる。あるいは実践的行動のなかでもすでに理論的認識がたえず働いていて，価値的関係の基底にある事物の実在的関係が認識されており，それを主題として認識を深めていけば，自然科学の対象である「真なる自然」が得られる。そして一旦得られた自然科学的に真なる存在も，それを自覚的に志向して関わるならば，私の環境世界に属するものとなり，したがって自然科学も環境世界に属するものとなる。[46] ここには『危機』における生活世界の二重性（科学の基盤としての生活世界と科学を含む生活世界）に似た問題があらわれているが，それには立入らない。

こうして自然科学的見方は，人格的共同世界をひとびとが生きるときのひとつの精神的態度になる。この傾向は現代では次第に強まっており，科学者だけでなく，一般の生活者の態度にもなっている。科学者はそうした社会的背景に支えられて，ますます自然科学的探究を深めていく。そして科学は物質的自然から生命的自然を説明し，生命的自然をもとにして人間の意識や精神を説明しようとする。人格的共同世界，精神的世界を自然科学的に説明しようとする。[47] もちろんそれによって明らかになることも多いだろうが，自然科学的な解明だけで精神的世界が説明してつくされるわけではない。説明しつくせると考える立場が自然科学主義である。フッサールはそれを批判した。しかしかれは自然科学主義を完全には克服していない。精神から自然へ下降する道と自然から精神へ上昇する道とを十分に統一することができていない。それは次のような「悪循環」の指摘としてあらわれている。

「われわれはここで悪循環におちいるようにみえる。なぜなら，われわれははじめに，すべての自然研究者，すべての自然主義的態度をとるものがおこなうような仕方で，端的な自然を措定した。そして人間をその物理的身体性のうえに或るプラスをもった実在性として把握したため，諸人格は副次的な自然対象，自然の構成部分となった。しかしわれわれが人格性の本質を究明すると，自然は，諸人格の相互主観的結合において構成されるものとして，したがってこの結合を前提するものとしてあらわれた。」[48]

この悪循環は，自然と精神が互いに他を前提していて，自然から精神へ上昇する道と精神から自然へ下降する道が相容れないようにみえることをあらわしている。フッサールはこの悪循環を解決していない。それはかれの現象学的方法に欠陥があるためなのか，それとも原理的に解けないものか。検討してみよう。

（五）

先の引用文中においてフッサールは，自然は諸人格の相互主観的結合において構成されたものだと述べている。これまでわれわれは，相互主観性の観点を殆んど考慮しないで論じてきた。ここでその観点からもう一度，三つの段階ないしは階層の構成を見直してみよう。

第三の階層である人格的世界，精神的世界はもちろん相互主観的世界であるが，第一，第二の階層である物質的自然，生命的自然の構成も究極的には相互主観的な構成である。フッ

サールは二つの自然の構成をまず唯我論的観点で，その構成可能性について述べ，ついで相互主観的観点から現実化した構成について述べている。

まず物質的自然であるが，個別的主観にとってもすでにその主観に現象する事物と客観的な事物（これはまだ感性的で客観的なものと，論理的数学的に固定される物理学的事物の両方を含む）との区別をおこなう動機があるが，[49] それが現実化するのは，相互主観的関係のなかにおいてである。何故なら私の感覚がノーマルでないかどうかは，私個人においてだけでなく，他者の感覚との比較において明らかになることであるし，感覚的事物からその感覚的質を捨象して物理学的事物を構成するためには，対象としての感覚的事物が感覚的主観（身体的主観）に相関すること，すなわち身体的主観は客体として感覚的事物と実在的因果的関係をもちながら同時に，それに相即して感覚の心的過程をもつ心理物理的統一体であることが認識されねばならないが，身体をそのような客体として認識することは，相互主観的関係のなかで，自己の身体を他者の身体と同様の対象身体として把握することによって可能となるからである。

次に生命的自然について言えば，身心統一体としての心理物理的主体の自己構成は，上述したように，触覚の二重性とそれに協同して働く他の感覚の総合によってなされる。この自己構成には，いわゆる運動感覚の問題がからんでくる。[50] すなわち感覚する身体の自己感覚と外的対象の知覚とは相即しながら変化するが，その運動感覚の全体系のなかで，私は自己の身体を生きた身体としてとらえる。この問題についてここで詳述するいとまはないが，われわれの論点からいえることは，フッサールはまず，個別的主観というか，この私において，身心統一体としての心理物理的主体の自己構成がいかになされるかを述べ，ついで，このような唯我論的経験では自己自身を空間的事物，つまり自然対象としての人間としてとらえていないとして，[51] 自己投入による他者の構成と，他者を媒介とした自己の身体の客体的把握について述べている。[52] すなわち，生命的自然も相互主観的関係のなかで構成されるのである。

最後に人格的共同世界が相互主観的に構成された世界であることは言うまでもない。諸人格はそれぞれ個別的人格でありながら，他の人格と交通し，相互に了解しながら，様々な次元で共同体的社会的結合をなしている。その関係のなかでこそ個人もまた人格となっているのである。人格共同体はまた共通の環境世界を相互主観的に構成しているのである。

この環境世界は，見方をかえれば事物世界であるが，人格的共同世界をともに構成する要素であるかぎり，精神的意味を担っている。[53] それは価値的美的等々の意味を担ったものであり，諸人格はそれに実践的に関わる。しかしその精神的意味を排除すれば，事物は物質的自然として見られる。すなわち，人格的共同世界もその底層には物質的自然があり，諸人格の環境をなす事物が，価値的精神的意味を担ったものとして相互主観的に構成される基底において，潜在的に自然的な事物としても相互主観的に構成されているのである。[54] 諸人格もそうした事物と行動的に関わる限り，そうした事物と実在的関係をもちうる身体をもったものとして，潜在的には自然的存在者なのである。

このような，人格的世界の底層において潜在的に機能している自然を顕在的に対象化するのが，広義の自然科学である。上述したように，物質的自然の科学も，生命的自然の科学も，その活動は相互主観的な営みである。つまり科学の活動は人格的共同世界，精神的世界の外部でおこなわれているのではない。第三編で述べられた物理学的事物の構成[55] は，第一編の

それと別のものではない。第二編の生命的自然の構成も同様である。第一編，第二編は第三編のうちに含まれるものである。

したがって上述したフッサールのいう悪循環は悪循環ではない。かれは一方で自然を前提してそのうえに身体，心，精神（人格）を構成することと，他方で人格的世界を前提してこの世界で自然を相互主観的に構成することとを，互いに他の前提を自己の帰結として奪いあう対立的な関係をなすものとしているが，人格的世界において相互主観的に構成された自然と，自然科学の対象として前提される自然とは同じものである。だから三つの段階，階層のあいだには，悪循環どころか，何の循環もない。あるのは第三段から第二，第一と下降して物理学的自然にいたる下向の道と，その逆をたどる上向の道である。いずれもしかし，飛躍を含んでいて連続的ではない。非連続の連続である。

物質的自然，生命的自然は，精神的世界の底層をなすものとして潜在的に機能している。われわれが精神的意味をもつものとして関わっている事物は，その底層において感覚的事物であり，物質的事物である。また人格的相互関係をとり結んでいる人間も，基底において生命的自然，物質的自然である。低次のものは高次のものを基づけているが，反面，高次のものに統合されて潜勢化している。高次のものへの統合には飛躍があって，低次のものから連続しない面をもち，高次のものは低次のものとは異なった新しい性質と機能をそなえている。高次のものへの統合がなんらかの理由で解体すれば，低次のものが顕在化してくる。

自然主義的態度による科学的探究とは，高次のものへの統合を実際に解体することなく，態度を転換することによって，低次のものを対象化しようとする方法的認識的探究である。しかし低次のものの解明はそのまま高次のものの解明にはならない。低次のものを統合して成り立つ高次のものは質的に新しい原理に従っているからである。したがって自然から精神への上向の道は連続的ではなく，飛躍を含むものである。

フッサールが「悪循環」として指摘しているのは，この飛躍，非連続を無視して，高次のものを低次のものへ還元してしまう自然科学主義的還元の誤りである。もちろん精神や心の基底をなす自然を科学的に究明すること自体が誤りなのではない。それはそれなりに必要なことであるが，そのような，心や精神を自然として究明することが，精神としての精神の究明，心としての心の究明と正しく結びつけられなければならない。学問論としてのフッサール現象学が目ざしたのは，このような諸科学の統一であった。しかもその統一は理論的認識としての諸学問の体系的統一にかぎらず，理論の統一は実践のなかでの統一に基づけられねばならない。つまり人格共同世界，生活世界のなかで生きたものとならねばならない。

理論的態度で対象の認識がなされているとき，実践的態度はなくなっているのではなく，一時括弧に入れられているだけである。対象の側でも同様で，精神的人格的世界から身心的統一体としての人間を抽出しても，その人間の精神的人格的側面は潜勢化して保持されている。また物理学的事物は，感覚的事物とは別物として，別世界にあるのではなく，感覚的事物が同時に物理学的事物として見られるのである。したがって見方を転換すれば，感覚的事物はまた有用な，価値のある美しい事物でもあるのである。人類発生以前の地球や宇宙は，自然科学の対象として究明されると同時に，人間がみるかぎりやはり美しいものであったり，おそろしいものであったりするのである。

広義の自然科学にとって人格的共同世界における精神的意味，人間的価値はいわば自然を自然としてとらえることを妨げるものである。そこで自然科学はそうした意味や価値を潜勢

化しながら，自然を自然をして，あるいは心や精神を自然としてとらえようとする。その科学的認識の結果は，再び価値的実践的態度でとらえ直され，実践的世界で生かされなければならない。科学とそれに基いて開発された技術は，それ自体として価値があるのではない。科学技術がいかに発達しても，それは人間的世界，フッサールのいう人格的共同世界に統合されて価値をもたなければ，無意味である。あるいは有害でさえある。かれの現象学的科学論はそのことを主張しているのではないだろうか。

(六)

われわれは『イデーンⅡ』のなかに，『危機』において自覚的，主題的に論ぜられるところの思想，すなわち，諸科学を生活世界へ還元し，それを基盤として諸科学の形成を考えるという思想と共通するものを見出し，『イデーンⅡ』の階層構成論を学問論的視角から，すなわち，人格的共同世界のなかから科学がその対象を抽出しながら自己の形成する下向の道と，反対に物質的自然の科学から出発して身体，心，精神をとらえるとともに，自然を精神的世界のなかに位置づける上向の道との統一として読んできた。フッサールの叙述は，上向の道をとりながら，そのなかで下向の道を明らかにしようとするものであったが，異なった時期に書かれたかれの手稿をかれの弟子がのちに編集整理してなったという『イデーンⅡ』の特殊な成立事情もあって，かれの論述ははなはだ錯綜している。

三つの階層は，上述のように，低次のものが高次のものを基づけるが，高次のものは低次のものを統合して新しい性質と機能をもつようになるという関係にあるが，フッサールの叙述はこの連続と非連続を明確にとらえていない。三つの階層のそれぞれの独自性を明確にとらえていない。とくに第二の階層である身心統一体の特質が不明確で，一方で心は身体とひとつであることによって，自然的に条件づけられていると考えられ（この場合，身体は物理的身体である），他方で心は精神によって条件づけられていると考えられている。[68] すなわち，身心統一体は物質的自然の側からみられたり，精神の側からみられたりするが，それ独自の特質は示されていないのである。これは身心統一が従う根本法則である「条件づけ」についても同様で，それは物質的自然の根本法則である「因果性」と人格，精神の根本法則である「動機づけ」のあいだにあって，ただ両方の法則の複合されたものでしかない。

また実在性についても同様で，心的なものの実在性は，物質的実在性をモデルにして考えられている。[69] 心の実在性は心と一体となった身体の実在性であるが，身体の実在性はそれが物質的な物体であるところに存する。フッサールは死んだ物体に心的なものを外的に結びつけて人間や動物をとらえる科学主義を批判するが，かれ自身，科学主義を越えていない。

心はまず自分自身の心として，内観，内的知覚によってとらえられる。[70] それはたえず流れてやまない体験流である。それは感覚，知覚，想起，感情，情動など様々な意識作用を含み，またそれぞれの意識対象を含んでいる。この心は身体において働いているから，身体に局在化（Lokalisation）されてとらえられる。死んだ物体としての身体に心が局在化することによって，生きた身体となる。

たしかにフッサールには触覚の二重性を媒介にした身心統一体としての心理物理的主体の自己構成の分析など，必ずしも物理的身体を前提しない身心論もある。われわれは先にその面をひき出して強調した。しかしそのような分析の一方，かれは物体としての身体と心を互

いに外的に結びつける思考方法を脱していない。精神的世界で相互主観的関係にある人格から，その精神的意味を捨象し抽出された身心的主体は，主観身体であると同時に対象身体であり，相互主観的関係のなかで実在性をもっている筈だが，それは必ずしも物理学的物体としての実在性ではない。下向の道をたどって抽出された身心統一体においては物質性は潜勢的にしか機能していない筈であるのに，フッサールは物質的自然を前提して心的実在性を規定しようとしている。

以上のように第二階層が独自性をもたないため，それは物質的自然のほうにひきつけられるか，精神にひきよせられるかする。その結果，身体を媒介にして，精神も自然に還元されるか，逆に自然が精神に還元されるかする。「悪循環」は自然科学主義の陥いる誤りであるだけでなく，フッサール自身が陥っていて脱却できない誤りを示しているのである。

自然科学主義を批判しながら，それに陥っているというかれの誤りは，部分的ではなく，かれの現象学そのものが根本的に科学主義を越えていない。上述のように，かれは内的知覚によって把握された体験流と純粋自我を物質的身体に局在化によって結びつけて心的実在を規定したが，このような内的知覚，内観による純粋意識の把握はこの場合だけに限らない。むしろ現象学的還元によって得られる絶対的意識，絶対的主観[14]は，あらゆる実在性を排除する徹底した内観によって得られたものである。自然は相対的であるのに対して，精神は絶対的であると言われているが，[15] この場合の精神は人格的共同世界で相互主観的関係にある精神ではなく，自然を排除し，相互主観的関係も排除したのちに残る精神，他人のそれと代えがたい私の意識，私の精神である。『危機』のことばで言えば，根源我である。この根源我をもとにして，自己投入によって他者が構成され，相互主観的世界が構成されることになるだろう。だから『イデーンⅡ』における人格的共同世界も究極的な世界ではなくて，超越論的主観によって構成された世界なのである。フッサール現象学の根本思想はいずれの時期でも変っていないというべきだろう。

フッサールが内観によって得られる私の意識を絶対的なものとすることには，それなりの正しさがある。「私」は概念的構築物ではない。今，現に生きて活動している個性的存在である。すべての人間がそのような「私」であり，「この私」を抹殺することはすべてを抹殺することである。「この私」はあらゆる意味の源泉であり，客観的社会的に意味づけられているものも，「この私」の意味づけ作用を介してのみ存在しているのである。フッサールのいう根源我にしろ超越論的主観性にしろ，それは実体的なものではなく，ひとりひとりの人間がかけがえのない私として，人称変化できない私として，生きているという事実を指してそう呼んでいるにすぎない。それは理論の問題ではなく，私が生きている根源的な事実なのである。

しかしこの根源的事実から出発しながらも，フッサールの現象学はやはりひとつの理論である。理論としてみるならば，内観によってとらえられた私の意識からすべてを導出し説明しようとするのは一面的である。たしかに私は自分のうちに世界のすべてを見ることができる。しかしそれは世界のすべてが私のなかにあることを意味しない。

例えば知覚は，それをあとで想起して，かつて知覚したことを思い出すとき，その知覚は私のうちにあるといえるが，知覚している瞬間においては，知覚は知覚している私と対象との関係の場においてある。身体は対象としてみれば，その皮膚の内側に閉じこめられているようだが，感覚する身体は世界にひろがっている。想像でさえ，想像の空間においてあるの

であって，私のうちにあるのではない。他人も私のうちにあると同時に外にある。他人との関係において私は私である。精神は人と人との間に存在する。私が内観によって自己のうちに見出すものは自分自身ではなくて，自己と他のもの，他のひととの関係である。私の意識は様々な相互関係の場においてあるのであって，私のうちに局在化しているのではない。フッサールは意識の自然化を批判し，意識の本質を志向性としてとらえたが，現象学的還元が結局は内観的反省を越えないものであるかぎり，内観という形で意識をすでに局在化している。したがってフッサールが内観によってとらえた心を物質的身体に局在化するという方法をとったのは，かれが科学主義にひきづられたからではなく，フッサールの現象学が裏がえしの科学主義だからである。かれは科学主義を批判するが，かれの現象学は科学主義を前提にしてのみ成り立っているのである。

人格的共同世界あるいは生活世界を基盤にして諸科学が形成される仕方を究明し，諸科学の意義と限界を明確にしながら，学問の全体的統一をはかろうとするフッサール現象学の課題は，その思想の精髄をひきつぎながらも，現象学をのり越えることによってしか解決されないだろう。その方向は，自然から精神にいたるまでのあらゆる存在を，先に示唆した関係論的，システム論的，構造論的な見地から解明することである。もちろん現象学の見地もそのなかで生かされなければならない。

もしこの方向が正しければ，フッサールの陥った悪循環なるものは解消するだろう。すなわち，物質的自然から精神にいたる階層の特質と機能の独自性がとらえられるとともに，各階層のあいだの連続と飛躍がとらえられるだろう。上向の道と下向の道とを統一的に把握する新しい哲学が，そして様々な学問の統一が可能となるであろう。

註

(1) Husserliana, Bd. III, S.7
(2) ibid. S.7～8
(3) Husserliana, Bd. IV, S.XVff.
(4) ibid. S.27, 90
(5) ibid. S.143
(6) ibid. S.77, 85
(7) ibid. S.136
(8) ibid. S.41～2
(9) ibid. S.42
(10) ibid. S.61, 62
(11) ibid. S.143
(12) ibid. §33
(13) ibid. §37
(14) ibid. II. Abschnitt, IV. Kapitel
(15) ibid. §46
(16) ibid. S.169
(17) ibid. S.185
(18), (19) ibid. S.186
(20) ibid. S.185
(21) ibid. S.189
(22) ibid. S.191
(23) ibid. S.191f.
(24) ibid. S.196～7
(25) ibid. S.172
(26) ibid. S.88
(27) ibid. S.182
(28) ibid. S.2
(29) ibid. S.8
(30) ibid. S.140
(31) ibid. S.138, 139, 155
(32) ibid. S.140
(33) ibid. S.141
(34) ibid. S.189, 216
(35) ibid. S.235
(36) ibid. S.215
(37) ibid. S.215, 232

(38) ibid. S.236
(39) ibid. S.239
(40) ibid. S.239f.
(41) ibid. S.247, 282～3
(42) ibid. §61
(43) ibid. S.276～7
(44) ibid. S.287
(45) ibid. S.183～4
(46) ibid. S.219
(47) ibid. S.184
(48) ibid. S.210
(49) ibid. S.77
(50) ibid. S.151
(51) ibid. S.161
(52) ibid. S.167
(53) ibid. S.197
(54) ibid. S.207
(55) ibid. S.207
(56) ibid. S.284
(57) ibid. II. Abschnitt, II. Kapitel
(58) ibid. S.92
(59) ibid. S.171, 179, 180
(60) ibid. §64